

我が青春の80年代は 少女漫画と共に

函館市医師会
石崎小児科医院

石崎 彰一

それまでSFとファンタジー一辺倒だった私が少女マンガにのめり込んだのは、弓月光の『エリート狂想曲』（お受験を扱ったハチャメチャコメディ）に出合ってしまったため。ちょうど自身が浪人で時代と境遇がはまった故であろう。入学後は暇に飽かせて、濫読が始まった。

導入は集英社で～榎村さとの『愛のアランフェス』（フィギュアスケート）、富塚真弓、聖千秋、塩森恵子、岩館真理子（いずれも正統派）。一条ゆかり『砂の城』（メロドラマ）。本田恵子『月の夜星の朝』（正統派のバスケットボール物、これは後年、成人後の物語が女性誌に掲載）、高橋由佳利、清原なつ。吉野朔実『月下の一群』、竹坂かほり、水樹和佳『樹魔・伝説』を経ての『イティハーサ』（日本の傑作SF）。榛野なな恵『Papa told me』。その後一気に拡大。小学館～川原由美子『前略・ミルクハウス』（ラブコメ）、惣領冬実『ボーイフレンド』、秋里和国『花の応援シリーズ』、吉村明美『麒麟館グラフィティ』（この時代にして既にDV夫からの自立を描く）、石塚夢見『ピアノシモでささやいて』（音楽物）、佐藤史生『夢みる惑星』（SF）。講談社～伊藤ゆう、高田祐子、上田美和。白泉社～樹なつみ『OZ』、津田雅美『彼氏彼女の事情』、山岸涼子『日出処の天子』、坂田靖子『バジル氏の優雅な生活』、篠有紀子『アルトの声の少女』、清水玲子（この人の作品はむしろ初期の読み切りが好みでした）。花ゆめ系で川原泉。秋田書店～碧ゆかこ『はるか遠き国の物語』、冬木るりか、中山星香『花冠の竜の国』。あと西村しのぶ『サード・ガール』、波津彬子、名香智子『レディ・ギネヴィア』。

以上、個人的に印象に残っているものを挙げてみた。90年代になると仕事に追われて自然に離れてしまったが、数年前に書店で『イティハーサ』の文庫本を見つけ、途中から読んでいなかったこともあり大人買い（早川書房さんありがとう）。久しぶりに翌朝まで読みふけてしまい、妻に叱られる羽目に。でも後日、妻もこの本の熱烈支持者になったのであるが。昨今はネットという便利なツールがあり、絶版本の搜索や、懐かしの作家さんの新作チェックも容易になり、優雅な読書ライフを楽しませてもらっています。

犬派？ 猫派？

江別医師会
はやし眼科

林 一彦

我が家には現在スコティッシュフォールドとマンチカン、二匹の猫が家族の一員として暮らしていますが、これら動物への心情を妻が語ります。

動物好きの人たちの中で、時々こんな質問が交わされることがあります。「あなたは犬派？ 猫派？」。数年前までの私なら何の疑問もなく迷わず「絶対犬派です」と答えていました。子供の頃から犬は身近でしたし、通算30年近くも犬を飼っていて本当に家族でしたから。そのような状況でしたので、今までは友人宅で私の視界を自由に横切る猫を見ても、私自身はほとんど何の親近感も愛情も感じることはありませんでした。

しかし、猫好きな家族のたつての願いで、二匹の猫と共に暮らすようになりました。それ以来、長年私の心にあった犬派という思いは「単なる思い込みで、誤解なんだ！」と気付かされることになりました。

誤解その1：猫はマイペースで気まま。

いいえ。ただ無理に拘束されたくないだけ。いつも私たちを見ています。

誤解その2：猫は人には付かず家に付くものです。いいえ。ただ警戒心が強いだけ。いつも人に撫でられ、安心してたいのです。

誤解その3：犬は飼い主に忠実だが猫は違う。

いいえ。猫も飼い主を心から信頼しています。「大好きよ」とこちらから伝えると、いつも「私も大好きよ」と甘え鳴きをして気持ちを返してくれます。そして身体をスリスリするなど、行動でも家族への愛情を示してくれます。絶大なる信頼感を持って。

いろいろこう書いているうちに、ふと思ひ込みや誤解というのは猫に対してだけではないのでは、という思いに至りました。人間関係や食べ物のこと、そして私自身のことなどなどです。自分自身が今まで生きてきたほんのわずかな知識や狭い環境の中で組み立てられた型にはまり「自分は…だから…はできない」、「あの人は…だから近づかない方が良い」「…には行きたくない」などと勝手に思い込み、今まで何と自分を狭めてきたのだらうと思うのです。常識や思い込みにとらわれずに考えていたら、もっと世界が広がっていたのにと気付かされました。

これからは犬派も猫派もなく、雄弁な動物たちにいろいろ教わりたいものだと思っています。